

目覚まし時計

小林守城

危険物を車の荷台に  
少し乱暴に投げ込むと  
突然目覚まし時計が  
鳴りだしたのだ  
もう何年も使われなかった  
娘の目覚まし  
突然なりだしたのだ  
まだここにいますよと  
突然泣きだした水子のようで  
捨てることは  
できなくなってしまうた  
古い家にあるピアノのように

忙しかったあの頃  
見過ごしていくことが  
生きることだったあのころ  
気付いてもいても  
後ろ髪をさつと撫でて  
切り捨ててきた  
凄まじい日々が  
鮮やかに苦しく  
思い出されて痛むこの頃

やさしさが戻れば  
生きる力が衰えているのだ  
こんな背反の時代を  
過ぎてきていま  
親子燕が賑やかに飛び交う  
庭先を見ながら  
深々と沈んでゆく夏の夕暮れ

鬼子母神

小林守城

真つ赤なサルビアと

黄金の金糸梅

柏葉紫陽花の淡白い花が

咲きそろう六月

その庭先で

前かがみに手入れをしている

ばあさんの尻を見つけた

欲も得もなく

皺の寄った

重い象の尻よう

小麦饅頭のように

なんとも柔らかなわれこみ

生きる原景

大きなお尻を見せられては

くすくす笑うしかなかった

美しく切れのあるものではない

効率や革新とは無縁のもの

わたしは時代を超えて

聞こえないように

ほくそ笑みながら

少年の枯野に出ていった

深いふるさとの向こうの

なんだ

鬼子母神のことではないか